

千葉商科大学教育研究会報告

東京都立第三商業高等学校教諭 本多 潤子

千葉商科大学教育研究会は、教育・研究活動の充実を目指し、教育に携わっている商大卒業生や教職を志している学生で構成されている。毎年8月の第1土曜日に研究大会を開催しており、17回目となる今回は広く参加を呼びかけ、賛助会員他8名を含む80名が参加した。

大会の内容は次のとおりである。

千葉商科大学教育研究会 第17回 研究大会

統一研究テーマ

「21世紀の商業教育：

商業教育の活性化を目指して」

サブテーマ

「商業教育での資格取得を考える」

①「日本の盛衰と千葉商科大学」

講演 千葉商科大学学長 島田 晴雄 氏

②「新検定 ビジネスコミュニケーション検定」

報告 千葉県立千葉商業高校 浅野 達也 氏

③「高等学校教育をめぐる最近の動向」

講演 文部科学省初等中等教育局

視学官 永井 克昇 氏

④「日商簿記1級を指導して～瑞穂会での学習～」

報告 長谷川 清晴氏 渋谷 里沙さん

⑤「教科書を通して観る新しい商業教育」

報告 実教出版(株)常務取締役 小田 良次 氏

⑥「新学習指導要領と授業の改善」

講演 文部科学省初等中等教育局児童生徒課

産業教育振興室 教科調査官 西村 修一 氏

⑦パネルディスカッション

「商業教育における資格取得指導のあり方」



永井氏は、高等学校教育をめぐる最近の動向を専門教育の視点から講演された。「高等学校教育の振興に関する重要事項について調査審議する高等学校教育委員会では、検討課題の一つとして『社会の要請にこたえる人材養成機関としての機能の充実』があり、キャリア教育、職業教育の重要性について検討されている」と話された。商業科だけではなく、普通科において職業教育を行うため、より柔軟な教育課程の編成、実施も検討されているとの話があった。

西村氏は、来年度から始まる新学習指導要領の概要と授業の改善について講演された。学習活動の例として、「具体的な事例をあげ考察や討論を行わせる」、「経済社会や実務に目を向けさせる」、「創造的な活動を行わせる」など、商業教育は資格取得だけではない様々な取り組みを行うことができるという話があった。

報告の中で興味深かったのは、千葉商科大学が「瑞穂会」として行っている資格取得のサポートである。高校で実際に日商1級等の指導をしていた瑞穂会の指導担当者が、授業の合間や5時限目、長期休業時間を利用して、税理士試験簿記論・財務諸表論講座、日商1級講座、日商2級講座などを開講しているのである。学生は空き時間も専用教室で簿記の勉強をすることができ、簿記漬けの生活を送ることになるが、指導者である長谷川氏は、「本人の高い意欲があれば、日商1級は誰でも取れる」と断言されていた。

大会の企画は、研究会幹事が全国の実践的な事例を基にして話し合い、商業教育の活性化を目指した講演や報告を決定している。今日、商業教育を考えていく上で「資格取得」は大きな課題である。そこで今年度は資格取得に関する内容を企画することにした。

しかし、年々商業高校で日商簿記2級を取得し、大学に進学する学生数が減少しているとの話があった。科目のレベルが上がっているが、生徒の検定に対する意欲や関心が年々低下しているということがこの話から窺えた。

昨年度から研究大会の最後にパネルディスカッションを行っている。今年度のテーマは「商業教育における資格取得のあり方」とし、推進派、否定派が壇上で意見を言い、会場とやり取りをするという設定であった。関心の高いテーマであったため、参加者から多くの意見が出た。

- ・定時制で目的を持たずに入学してきた生徒が「資格を取得する」という目標を持ち、取得後に達成感を味わっていて、その姿を見ることができて良かった。
- ・資格取得のための授業になってしまうのは良くない。そもそも資格取得とは本人が「この資格を取りたい」と思って受検するものである。全員に受検をさせるのは違和感がある。
- ・担当クラスの資格取得率が教員の評価になっている。(自己申告などに数値を記入することになる)
- ・中学生にアピールする場合に、資格取得率などの数値が出ているとインパクトがあるし、「検定が取れる」と話す保護者への印象も良い。

私は前任校が「新しいタイプの商業高校を作る」というコンセプトの学校であったため、NPOという新しい分野の学習を取り入れ、ソーシャルビジネスを学ぶ授業(課題研究)を受け持っていた。生徒が調べ学習や発表など、主体的に授業に取り組むよう教材を工夫することは大変であったが、自らが新しい知識を吸収するために外部に勉強に行き、一緒に担当している同僚と意見交換しながら授業に反映させていくことは楽しい作業であった。そして、生徒が授業の中で課題について考え、悩みながら解決し、発表などを通して成長していく姿を見た時は大きな喜びがあった。

しかし、都立の商業高校の現状では、資格取得が目的になっている授業が少なくないように思う。生徒は様々な科目で検定を受検するので、簿記、電卓、ワープロ、情報処理などの検定を淡々と受けていく。

そのためか、生徒自身の資格取得に対する意欲や関心が低下しているように感じる。「この資格が欲しい」と感じている生徒はどのくらいいるのか、「やらされている」感があるのではないか、このように感じるのである。

私はディスカッションで「資格取得否定派」として壇上に立ったが、スキルを身につけ資格をもつことは重要であるし、就職や進学においても資格で有利になることも少なくないため、全てを否定するわけではない。本来の資格取得の意義を確認し、生徒が「この資格が欲しい」と思い、その目標に向かって努力するための環境作りとサポートを行うこと、また、身近な事例や社会の動きに即した事例を用いて生徒が社会に関心をもつような授業を行うこと、そのために自分自身がアンテナを高くして教材開発を行うこと、これらは日々実践したいと感じていることである。

今回のディスカッションにおいて、多くの参加者の意見を聞くことはできたが、それぞれの教員が商業における資格取得についての思いがあり、50分では時間が足りず、議論まで到達することができなかった。来年度はテーマを絞り、さらに核心にせまる議論を展開できれば良いと思う。

時代とともに社会のニーズは変化する。商業教育も時代とともに内容を変更していく必要があるのではないかと。私は初任時代、校長から「不易と流行」という言葉を教えていただいた。変わらずに残していかなければならないもの、変えていかなければならないもの。統一テーマにあるように21世紀の商業教育はどのようにあるべきか、商業教育を活性化させるためにはどうすべきか、この研究大会は考えるきっかけを与えてくれる。大会参加者の減少が課題となっているが、今後も魅力ある報告内容、講演を用意し、8月第1週の土曜日に開催される予定である。多くの方にご参加いただき、商業教育の活性化を目指して活発に意見を交換していきたい。